

沖縄貝塚時代集石遺構集成

Compilation of Stone Clusters in Okinawa Shell-mound Period

安座間 充

AZAMA Mitsuru

ABSTRACT: A number of Late Jomon Period (Late Okinawa Shell-mound Period) sites have been reported in the Okinawa Archipelago district; however, their contents have not been studied in detail. In this paper, a compilation of stone clusters from the Okinawa Shell-mound Period is carried out in order to establish a data base for the future analysis. The author also makes an attempt to compare the stone clusters of Okinawa and Amami districts.

1. はじめに

奄美・沖縄諸島地域では縄文時代後期・相当期(沖縄編年の貝塚時代前期)を検出数上の盛期に集石遺構の検出例が徐々に蓄積されつつあるが(表2), その内容的な検討はあまりなされていないと思う。今回, 沖縄諸島地域における貝塚時代早・前・中期(縄文時代相当期)および同後期(概ね弥生時代～平安時代併行)を対象に既報告資料の集成を行い^{註1}, 今後の継続的研究にむけた基礎データとしたい。

概念の整理 今回集成の前提としてまず集石遺構の概念整理を行う必要がある。一般に「集石遺構」として扱われる遺構は, 縄文時代草創期・早期によくみられる被熱破碎・赤化した礫が1箇所に集積された(あるいは一定の範囲が観取される)ものを指す場合が多く(表1参照), 2003年2月行われた第13回九州縄文研究会宮崎大会(テーマ・九州の縄文時代集石遺構と炉穴)でも, 集石遺構を「人為的な加熱による破碎・赤化礫が集積した遺構」の共有認識により集成を行っている(九州縄文研究会編2003)。

沖縄考古学においても同様「集石遺構」と聞きまず連想されるのは, 宮古島浦底遺跡(南琉球新石器時代後期; Shijun.A1990)や沖縄島伊武部貝塚(縄文時代後期相当; 沖縄県教委1983)における検出遺構のような調理施設の性格が類推される「集石遺構」「集石炉」であろう。だが一方で機能的内容的には不詳だが, 礫が集中した状態から「集石遺構」と報告されるケースも少なくない。徳永貞昭氏(徳永1990)も述べるように, 被熱破碎礫や構成礫の分布範囲, 遺物内容等から, その機能的性格的な推測幅がある程度狭め得るものは「焼礫集積遺構」「集石炉」などと呼び分けるのが望ましいように思う。やや回り道をした感も否めないが, 本稿では報文記載に「集石遺構」とあるものも包括的に集成した。

作業前提 集石遺構は遺構規模＝礫範囲や被熱の有無等から機能的性格的な類推も概ね可能である。今回の集成の作業前提として, まず県内既報告資料の報文記載にみる分類を参考にみることにする。沖縄県内では九州本土でみられるような集石遺構の検出例は少なく, 各構成要素・属性による分類も殆ど行われていない状況にある。伊武部貝塚では遺構規模・構成礫の状況および掘込の有無等から「集石炉」「土壇集石遺構」「石敷集石遺構」というように機能・性格を意識した名称を用いている(沖縄県教委1983)。集石遺構が15基以上確認された宮古島アラフ遺跡では, 構成礫の粗密状況や掘込の有無から分類, A類(掘込なし)とB類(掘込あり)に類別している(アラフ遺跡発掘調査団2003)。

集石遺構属性表(表2)は, 基本的には九州縄文研究会編2003の集成表を参考に, 出土遺物の内容も報告書記載からでき得る限り遺構単位にまとめた。以下に表中の各属性について簡記しておく。

表1. 主な概説書および主要論文にみる「集石遺構」の定義・説明

文献名 執筆者	集石遺構
『世界考古学事典』 平凡社 1979年	径1～2mの範囲に大小さまざまな礫が多数あつまって見られる遺構。たんに礫群とよぶこともある。その性格や用途は必ずしも明確ではない。集石の下に土壌のあるもの、集石の下がくぼんでいる程度のもの、土壌がなく礫の積まれただけのもの、礫自体が火熱を受けて焼石群となっているもの、また焼石や炭化物などの、火を用いた痕跡がまったくないものなどさまざまな形態がある。礫の多少もまちまちである。前述のように性格は明らかではないが、焼石や焼土、炭化材の存在するもののあることなどから、調理場としての性格も考えられ、ポリネシアなどにみられる、いわゆるストーン・ボイリングstone boilingとの比較も試みられている。日本では先土器時代のほか、縄文早期にしばしばみられる。礫がまとまりをもたずに漠然とした範囲の中に集められている場合にも集積遺構とよぶことがある。
『日本考古学用語辞典』 学生社 1998年	先土器時代・縄文時代早・前期にみられる特殊遺構。焼けた拳(こぶし)大ぐらいの石塊がほぼ円形に集まって、径二～三mぐらいの円状をなす。石を焼きその熱により食物を蒸したのと考えられている。しかし近年その対象の範囲は広く、石塊などを一つの区域にまとめて配したものを呼称するようになった。
『最新日本考古学用語事典』 柏書房 1996年	人為的に集められた石の集合体。特定の形を呈することはないが、特に円形に集中するものに対して、そこに人為を読み取り、遺構として判断する場合が多い。配石遺構との区別もそれほど明確になされぬままに使用されているが、配石遺構に使用される石の大きさに比べて、より小さな石からなるものを指す傾向がある。先土器時代では礫群という用語を使用し、集石遺構と呼ぶことはまれである。
『縄文時代研究事典』 東京堂出版 1994年	礫が集合状態にある遺構で、礫が意図的に配列されたり組石などになっているものは配石遺構と呼んで区別している。集石遺構には、礫だけが集合状態にあるものと、土坑内に礫が集合状態にあるものとの大きく分けられる。また集合状態にある礫が、自然の礫からなっているものと、礫が火熱を受けて赤色化し、多くが破碎されている、いわゆる被熱破碎礫からなるものがある。特に後者の場合には、礫に煤やタール状の付着物がつくものや、遺構内から炭化物が検出されることが多い。この被熱破碎礫からなる集石遺構のうち、土坑をともしなわれない礫だけが集合状態にあるものは構成礫群と呼び、主に岩宿時代に蒸焼きや石焼き調理の施設として使われたものである。それに対して、土坑内に被熱破碎礫が集合状態にあるものは集石土坑と呼び、縄文時代に蒸焼きや石焼き調理の施設として使われたものと考えられている。また、自然の礫だけが集合状態にあるものは、様々な機能・用途が想定されるが、それらは個々の遺跡の実態に即した検討が必要であって、一般に機能や用途を規定しない包括的な呼称として集石あるいは集石遺構が用いられることが多い。
徳永1990(九州縄文時代の集石遺構)	人為的な加熱に因ると思われる赤化や破碎などの状態を示す礫が径約1m前後の範囲に集中する(九州で殊に縄文時代早期に普遍的に検出される)狭義には上田則男氏や谷口康浩氏が主張するように「焼礫集積遺構」が妥当であると考えられるが、受熱の有無は明らかでないが形態的に区別できない遺構も含めて扱うため、より包括的な用語として「集石遺構」を採用する。
八木澤1994(南九州の集石遺構)	他の地点と比べて直径1m前後の範囲に礫が集中する遺構とし、受熱の有無は明らかでないが、形態的には区別できない遺構をも含める。
九州縄文研究会(編) 2003	人為的な加熱による破碎・赤化礫が集積した遺構。

(表2における集石遺構属性 凡例)

遺跡番号および遺構番号：後者は報告書記載にある遺構名・番号。

帰属時期：遺構内・周辺出土の土器型式等から導かれる帰属年代観。

礫範囲・平面観：長軸×短軸(単位m)および平面観。

断面観：

礫個数・重量：報告書記載に構成礫個数・重量計測がある場合記載。

深度：掘込みの深さ。掘込み無し(もしくは認められない)場合「×」。

礫密度：密(>やや密)(>やや疎)>疎 で表現。

炭化物の有無：○(一定量),△(僅量だが確認),×(全く認められず)。

出土遺物：集石遺構内から得られた遺物の内容(土器その他の製品、獣魚骨・貝類等の自然遺物)。

備考等：構成礫の材質・分布状況や調査者・報告者による遺構内容(機能・性格等)に関する所見など。

2. 沖縄貝塚時代の集石遺構—概要—

沖縄諸島地域の貝塚時代集石遺構を概観するにあたり、同じ琉球列島中部圏内にある奄美諸島地域の集石遺構についても触れる必要がある。該地域の縄文時代集石遺構については八木澤一郎氏が「鹿児島県下の縄文期集石Ⅱ」で集成・検討しており、そのなかで九州南部・大隅諸島地域との比較からその地域的特徴について言及している(八木澤1993)。重要な指摘なので以下箇条書きに整理する。

①九州南部・大隅諸島地域と奄美諸島地域における検出数・帰属時期の差異

大隅諸島地域は九州同様縄文時代早期に検出数のピークがあるが、奄美諸島地域では縄文時代中期～後期(相当期)にほぼ収束され縄文時代前期より遡る例は未検出。

②集石遺構の検出遺跡における遺跡立地の差異

九州と異なり奄美諸島地域では内陸性高地に立地する縄文晩期相当遺跡では住居跡に伴う検出例はほぼ皆無であり、11遺跡例すべて臨海砂丘・旧砂丘にある状況から調理対象は魚類・貝類と類推。

③集石遺構検出数と礫・石材産出地域の関係

当該島嶼地域における集石遺構検出例は奄美大島(10遺跡)および徳之島(1遺跡)にほぼ限定され、この島嶼間にみられる差異は堆積岩・火成岩の産出に起因する蓋然性が考えられる。

なお、九州縄文研究会編2003の集成表に該地域の集石遺構検出数の増加はみられず、上記の地域的特徴はそのまま変わらない。以上を踏まえて沖縄諸島地域における貝塚時代の集石遺構を概観する。

沖縄諸島地域の貝塚時代集石遺構は管見で18遺跡あるが^{註2}、土器型式から類推される帰属年代をみると、伊波・荻堂式土器主体期である貝塚時代前期(縄文時代後期)中葉がかなり多く、貝塚時代中期(縄文晩期相当)、貝塚時代後期(弥生～平安時代併行期)は各期ともに1～数例程度である。遺跡立地も、大半は海岸線砂丘や後背沖積地に立地する遺跡の検出だが、古我地原貝塚(沖縄県教委1983)や苦増原遺跡(具志川市教委1977)のように内陸部の石灰岩台地に立地した遺跡での検出例も僅かだがある。面積的規模や掘込み・被熱礫の有無など遺構要素・属性にバリエーションも観取される。

つづいて各報告書記載にみる集石遺構について、遺構内容および調査者・報告者所見を(私見も若干付しながら)整理する。ストーンボイリングや地床炉・礫床炉など調理施設の機能・性格が考えられる集石遺構と、それ以外の性格が考えられる(非調理施設の)集石遺構に分けてまとめた。

調理施設の機能・性格が考えられる集石遺構 伊武部貝塚では集石炉(3基)、土壙集石遺構(5基)、石敷集石遺構(1基)に、遺構遺棄後に破壊されたとみられる集石(3基)の計12基が確認されている。帰属年代観は伊波式土器主体の時期幅に概ね収束される。留意されるのが、遺構間で遺構規模や出土遺物の内容・量的な差異を明確に認める点である。[F12:4](F12グリッド検出遺構4)では複数種類の動物骨魚骨が際立って多く、調査時の状況も炭化物は殆ど認められなかったが被熱破碎礫や焼土が複数みられたという。北原貝塚検出の集石遺構(1・2号)はともに明瞭に掘込を認め、礫分布もきわめて平面的で特徴的である。被熱とみられる破碎礫や煤に似た付着物がみられ、調査者は炉的機能の可能性を推量している。1・2号ともに掘り込みの断面観は略「U」字状を呈すが深度に差異がみられ気になる。南琉球新石器時代の遺跡に似たような内容の集石遺構も確認されている(江上ほか2004)。アラフ遺跡検出の円礫集積遺構(径約0.45m)は、サンゴ石灰岩からなる構成礫中に被熱破碎礫もあるが炭化物は無く、掘込みをもつが礫分布はきわめて平面的で密に敷き詰められた観である。当該期の沖縄諸島地域と宮古諸島を含む先島諸島地域は一般には「別個の文化圏」との共有認識にあるなかで、両島嶼地域との関係を積極的に評価する訳ではない。ただ、両島嶼地域には共通・類似した遺物もあり(盛本1992)、より広汎にその類似性・共通性を考えるうえで興味がひかれる。調理施設の性格が類推される集石遺構のなかで、石灰岩地帯の地域的特性を色濃く反映する例が具志堅貝塚検出の集石遺構であろう。当該遺構で特徴的なのは構成礫が微小貝・小礫を核に石灰分が凝結した「ケイブボール」と呼ばれる径2～3cm程度の小型円礫からなる点である。報文記載によれば、調査区が立地する砂丘地では形成されないことから遺跡外からの持ち込みとみられ、構成礫に被熱を認めるが近接して検出された貝殻一括廃棄では貝殻自体に被熱を認めない状況から、調査者はストーン・ボイリング的な

性格を推量している。検出面の帰属時期は貝塚時代後期前葉(浜屋原式土器期)である。考古学年代上ほぼ同時期の例として真志喜安座間原第一遺跡・第二遺跡検出の集石遺構、阿波蓮浦貝塚Ⅳ層面での被熱礫集中がある。前者の安座間原第一遺跡は貝塚時代前・中期の埋葬遺構群および同後期前葉の集落遺構群の複合遺跡で、被熱礫・軽石を集積した炉址状集石遺構が複数基検出されており、報文記載によれば構成礫は径2～5cm程度の小礫であり、具志堅貝塚例との類似性も想起され興味深い。あわせて、掘込みを伴う拳大程度の礫・軽石からなる集石遺構も10数基検出されているが、調査者所見によれば被熱礫は僅量で、その機能・性格については不詳である。安座間原第二遺跡でも軽石・サンゴ礫・石灰岩礫からなる集石遺構が複数基検出されている。土坑(掘り込み)内に集石されたものと層面(生活面)に集石されたもの(マウンド状?)の二者があり、前者の掘込みを伴う集石遺構はいずれも堅穴遺構に近接して集中的にあり、被熱礫は殆どみられないようである。

その他の機能・性格が類推される集石遺構)ここでは、ストーン・ボイリング(焼石煮沸)やアース・オープン(地炉)といった調理施設の機能・性格の蓋然性が薄い(調理施設以外の機能・性格が類推される)集石遺構および広義での集石遺構に包括されるものをまとめた。伊是名貝塚では堅穴住居覆土上で検出された集石遺構について、調査者は面積的規模や礫被熱が軽度でタール等付着物がみられない状況は、「日常的な加熱施設(調理施設の機能・性格)とみるのは不自然であり、少数回使用後に一括廃棄された大型加熱施設例えば土器焼成施設の可能性」をみている。そして、「住居廃絶後に大型加熱施設として再利用された」可能性を指摘している点は重要である。奄美・沖縄諸島地域の集石遺構を集成すると、堅穴住居遺構と面積的に同規模(径2m以上)の遺構が複数あることに気づく。伊是名貝塚同様堅穴住居遺構覆土上に構築された集石遺構は吹出原遺跡でも確認されている(7号A集石遺構)。住居廃絶後の掘込み・凹面構造を別施設に再利用した可能性も十分考えられるのだが、明らかな被熱・石灰に似た灰固結を伴う例やさほど火熱の痕を残さない例、構成礫の粗密・分布状況などに差異性も観取でき、今後類例をあわせた具体的検証が行う必要がある。吹出原遺跡でも堅穴住居や屋外炉とともに集石遺構が複数確認されているが、集石範囲(面積的規模)およびその平面観から堅穴利用の蓋然性がある集石遺構もある(第2号集石遺構)。遺構内容は不詳だが、報文記載による限り検出時に被熱礫や炭化物など加熱施設的な様相を窺え得る痕跡はあまりみられなかったようで、石器・石材が比較的ある状況から堅穴廃絶後は別施設に利用せず短期間で埋められた印象を報告者は述べている。

大型加熱施設として特記されるのが宇地泊兼久原第一遺跡検出の集石遺構である。現在整理途上で詳細は不詳だが、密に詰め込まれた観を呈する多量の被熱した石灰岩礫、炭化物・灰があり、床構造および壁部の土留めも認められる。気になるのが被熱礫を覆うようにある遺構下部の灰固着層で、他の既報告資料にも例がなく、遺構構造もあわせてその機能的性格的内容を考える上で留意される。他方で、埋葬行為との関係性が類推・思量される集石遺構も、複数の遺跡の報告書記載にみられる。大原貝塚検出の集石遺構(SH01)も構成礫分布は密で面積的にも大きい(長軸約7～8m・短軸約3～4m)。被熱礫・炭化物はみられず面積的規模ともあわせて加熱施設的な性格ではない模様である。平面検出後埋め戻しのため掘込や構成礫分布など断面構造の詳細は不詳だが、実測図・写真からは堅穴遺構廃棄後何らかの意図で礫を密に詰めた観を呈する。比較的広範囲に構成礫の面的分布する集石遺構は具志川島遺跡群南地点の例などがある。なお大原貝塚例では遺構に近接して人骨が検出されており、調査者は埋葬に関係した機能・性格をみている。同様に埋葬行為に関わる可能性がある集石遺構として安座間原第一・第二遺跡検出の集石遺構がある。報文記載によれば安座間原第一遺跡では上位埋葬(貝塚前期中葉～中期前葉頃)に付随してサンゴ円礫を方形状(面的)に敷き均した集石遺構や石灰岩角礫を積上げた積石遺構などがあるという。第二遺跡の層面検出の集石遺構は性格は不詳だがイヌ(家

犬)埋葬遺構の近縁で検出されており、何らかの関係性がある可能性も考えられる。同市内にあるヌバキ遺跡でも堅穴住居遺構内(仲原式土器期)に掘込を伴わずマウンド状に礫が集積された集石遺構が検出されている。遺構性格は不詳だが人骨(ヒト歯)やシャコガイが確認されており示唆的である。

3. おわりに

今回、沖縄諸島地域における貝塚時代(縄文時代相当～平安時代併行期)の集石遺構を集成した。本稿は以前に筆者が徳之島面縄第2貝塚の発掘調査で集石遺構を目の当たりにした経験が契機のひとつとなっている。また、今年度(2005年)2月に沖縄県をはじめて含めた九州縄文研究会第15回大会が開催された。同研究会では第13回大会テーマ「集石遺構と炉穴」で九州全体での集成を行っているが、該資料における沖縄諸島地域の追補も今回の目的であった。調理施設の集石とそれ以外の機能・性格が考えられる集石遺構で暫定的に線引きをし整理したが、今後より具体的な検討を要することは言を待たない。宮古島地域など南琉球新石器時代の集石遺構集成など残された地域・課題もあわせて今後も継続的に取組み補遺していくつもりである。

成稿に際し下記の先生方にご教示・ご助言を頂きました。殊に当時の調査担当者・報告者の方には検出状況や遺構解釈等に関する話が伺え、筆者の疎い報告書の読解だけでは心もとなかったですが、お蔭で内容的な幅を加え得たと思います。末文ですが記して謝意を表します。(あ～お順・敬称略)

上原 静、江上幹幸、岸本義彦、當銘由嗣、豊里友哉、比嘉賀盛、盛本 勲、八木澤一郎

(あざま みつる：調査課 嘱託員)

註

1. 杉井健氏も沖縄貝塚時代前期～近世期までの住居遺構・火処の集成のなかで炉的機能・性格が考えられる集石遺構について集成作業を行っている(杉井2001)。あわせて参照を勧めたい。
2. 1962(昭和37)年に行われた琉球政府文化財保護委員会による山下町第一洞穴遺跡第1次調査でⅢ・Ⅴ層の木炭層において被熱した石灰岩礫が動物骨・魚骨とともに検出されたとある(高宮1968)。

引用・参考文献(編著者名あ～お順・刊行年順)

(論文・レポート等)

木崎甲子太郎(編著).1985.『琉球弧の地質誌』沖縄タイムス社。

九州縄文研究会(編).2003.『第13回九州縄文研究会宮崎大会 九州縄文時代の集石遺構と炉穴-発表要旨・資料集-』九州縄文研究会・宮崎考古学会・宮崎。

杉井 健.2002.「沖縄諸島における居住形態の変遷とその特質」.木下尚子(編)『先史琉球の生業と交易-奄美・沖縄の発掘調査から-』。熊本大学木下研究室。

徳永貞紹.1990.「九州の縄文時代集石遺構-研究の現状と課題-」『肥後考古』第7号.肥後考古学会。

八木澤一郎.1992.「鹿児島県下の縄文期集石Ⅰ」『南九州縄文通信』No6.南九州縄文研究会。鹿児島。

———.1993.「鹿児島県下の縄文期集石Ⅱ」『南九州縄文通信』No7.南九州縄文研究会。鹿児島。

———.1994.「南九州の集石遺構」『南九州縄文通信』No8.南九州縄文研究会.鹿児島。

(発掘調査報告書) 文献Noは表2の遺跡番号と一致。

1・2.岸本義彦ほか.1994『具志川島遺跡群-発掘調査報告-』村文化財調査報告第9集.伊是名村教育委員会。

3.林 徹.2001.「3-2.伊是名貝塚の集石」.伊是名貝塚学術調査団(編)『伊是名貝塚—沖縄県伊是名貝塚の調査と研究—』勉誠出版.東京。

4.岸本義彦(編).1986.『具志堅貝塚-発掘調査報告-』町文化財調査報告書第集.本部町教育委員会。

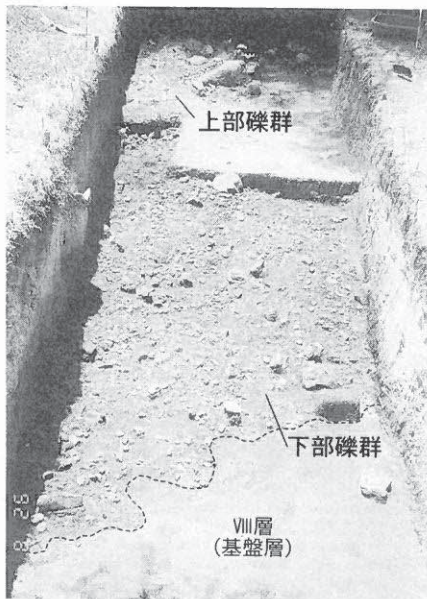
5. 岸本義彦(編).1988.『知場塚原遺跡-発掘調査報告-』町文化財調査報告第5集.本部町教育委員会.
 6. 仲宗根禎・新城卓也(編).2002.『部瀬名南貝塚-市道・部瀬名線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告-』市文化財調査報告15.名護市教育委員会.
 7. 上原 静(編).1983.『伊武部貝塚発掘調査報告書-国道58号線拡幅工事に伴う緊急発掘調査- 遺構・貝製品・石器・貝殻編』県文化財調査報告書第51集.沖縄県教育委員会.
 8. 仲宗根求・古堅勝美(編).1990.『吹出原遺跡-個人住宅建築に伴う緊急発掘調査報告書-』村文化財調査報告書第9集.読谷村教育委員会.
 9. 島袋 洋(編).1987.『古我知原貝塚-沖縄自動車道(石川～那覇間)建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(6)-』(本文編・図版編).県文化財調査報告書第84集.沖縄県教育委員会.
 10. 新田重清・ほか.1977.『苦増原遺跡-沖縄県企業局導水管工事に伴う発掘調査報告書-』市文化財調査報告書第1集.具志川市教育委員会.
 11. 安里嗣淳・島 弘(編).1987.『北谷町 砂辺サーク原遺跡-北谷浄水場への導水管敷設工事に伴う緊急発掘調査報告書-』県文化財調査報告書第81集.沖縄県教育委員会.
 12. 比嘉 聡・ほか(編).1999.『喜友名貝塚・喜友名グスク-宜野湾北中城線(伊佐～普天間)道路改築事業に伴う緊急発掘調査報告書(I)-』県文化財調査報告書第134集.沖縄県教育委員会.
 - 13.『喜友名東原ヌバタキ遺跡 第四次発掘調査記録-商業用店舗建設に係る緊急発掘調査の概要-』市文化財保護資料第39集.宜野湾市教育委員会.
 14. 宜野湾市教育委員会(編).2002.『宇地泊兼久原第一・第二・第三遺跡発掘調査記録-宇地泊第二地区土地地区画整理事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査[図録集]-』宜野湾市文化財保護資料第53集.
 15. 松川 章(編).1992.『城間遺跡-牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告Ⅲ-』市文化財調査報告書第19集.浦添市教育委員会.
 16. 高宮廣衛・中村 愿・知花一正・山城安生・玉城京子・山城直子・西久保淳美.1999.『沖国大考古』第12号(渡嘉敷村阿波連浦貝塚発掘調査報告).沖縄国際大学文学部考古学研究室.宜野湾.
 17. 當眞嗣一・上原 静(編).1980.『大原-久米島大原貝塚群発掘調査報告-』県文化財調査報告書第32集. 沖縄県教育委員会.
 18. 盛本 勲(編).1995.『北原貝塚発掘調査報告書』県文化財調査報告書第123集.沖縄県教育委員会. 一. 呉屋義勝・大城 広江・宮城ゆりか(編).1989.「36. 真志喜安座間原第一遺跡 37. 真志喜安座間原第二遺跡」『土に埋もれた宜野湾』市文化財調査報告書第10集. 宜野湾市教育委員会.
- Shijun Asato."THE URASOKO SITE—A Sketch Of the Excavation in Photographs—" The Gusuk - ube Town Board of Education. 1990.
- 江上幹幸・松葉 崇(編).2003.『アラフ遺跡調査研究Ⅰ-沖縄県宮古島アラフ遺跡発掘調査報告-』アラフ遺跡調査団・六一書房.
- 金武正紀(編).1985.『シヌグ堂遺跡-第1・2・3次発掘調査報告-』県文化財調査報告書第67集. 沖縄県教育委員会.
- 高宮廣衛.1968.「山下町第1洞」『那覇市の考古資料』(那覇市史資料第1巻1).那覇市史編集室.

今年度で退職される安里嗣淳所長との最初の接点は、非常勤講師で担当されていた「考古学特講Ⅲ」を学部3年に受講した時である。南洋諸島の吹き矢を持参・実演するなど講義はユニークで和やかな雰囲気だった。どうかいつまでもお元気で、また瀬底の別邸に伺える日を楽しみにしています。

表2. 沖縄貝塚時代集石遺構

No	遺跡名	遺構番号	帰属時期 土器型式	サイズ 破範囲(m)/平面観	破個数/ 重量(kg)	断面観	掘込の 深度(m)	破の 密度	配石 有無	炭化物 の有無	その他備考 破材質・分布状況等
				出土遺物(土器・その他の製品・自然遺物等)	—	—	—	疎	—	△	
1	具志川島遺跡群西地点	—	貝塚後期前半 弥生時代併行	—	—/—	—	—	疎	—	△	トレンチ壁面で確認。
2	具志川島遺跡群南地点	—	縄文後期中葉 (伊波式土器)	当該箇所周辺に少量の土器片、木炭とともに貝類・魚骨の集中的分布もみられた模様。 詳細不詳だが径3.0m以上	—/—	—	—	密	—	—	Ⅷ層下部で検出。検出面埋戻しのため詳細は不詳。堅穴状遺構の可能性もあり。
3	伊是名貝塚	1号集石 (P C 1)	縄文後期中葉 (伊波式・萩堂式土器)	一辺2.5～3.0mの不整形な略三角形ないし台形状 伊波式、萩堂式土器が多数個体出土しているほか、打製石斧(砂岩製)1、石匙状石器(黒色千枚岩製)1、削器(チャート製)1が出土。動物骨はリュウキュウイノシシ1・ウミガメ類4・ヘビ類・トリ類各1で魚骨はニザダイ類1、貝類は、イソハマグリ・ニシキアモブネ・チョウセンサザエ・小形イモガイ・陸産マイマイなど40種以上を検出。なお、1号堅穴住居床面出土試料4点のC14年代測定は3300±340～3520±340。	—/—	—	—	密	×	×	1号住居址覆土上面で検出。構成破はチャート、砂岩、石灰岩の角礫(拳大程度)主体で面的な分布。破自体に軽度の被熱認められるが調理施設の機能には否定的。
4	具志堅貝塚	F H Ⅲ	貝塚後期前半 弥生時代併行 (浜屋原式主体)	1.7×1.3m/不整形な略円形南端に径0.4m/略円形の土坑 遺構内からの、当該遺構に隣接してチョウセンサザエ、イソハマグリ(食料残滓)の一括廃棄を検出。貝殻自体に被熱認められない点から焼窯を利用した調理(ストーンボイリングか)と類推。	—/—	鍋底状	0.2～0.25 (土坑)	やや疎	×	△	石灰岩礫(数cm大の球状礫)。土坑から掻き出された状態。破床炉(直接的調理施設)と異なる性格と調査者は解釈。
5	知場塚原遺跡	1号土坑	縄文晩期前葉 (宇佐浜式主体)	径0.9m/ほぼ円形 土器片少量、石材。動物骨はイノシシ(下顎骨1・肋骨14・脊椎骨1・肩甲骨1・中手骨1・指趾骨1・歯牙6)のほか、リクガメ14、ウミガメ2。魚骨はフエキダイ科5、ペラ科1、ブダイ科3、ハリセンボン科1。	—/—	鍋底状	0.50m	密	×	×	調査者は貯蔵穴の機能も類推。
6	部瀬南遺跡	2号土坑	縄文晩期前葉 (宇佐浜式主体)	0.75×0.6m/卵形 比較的多量の土器片(宇佐浜式類似ほか)。動物骨はイノシシ(脊椎骨2・肋骨1)。貝類はチョウセンサザエ(殻)1・オニツノガイ1・マガキガイ1・ゴホウラ1・クモガイ1・シレナジミ2。	—/—	鍋底状	0.15m	疎	×	×	掘込は基盤岩盤まで達している。調査者は貯蔵穴の性格も類推。
7	伊武部貝塚	5号土坑	縄文晩期前葉 (宇佐浜式主体)	0.6×0.5m/略楕円形 若干量の土器片、石材。動物骨はイノシシ(上腕骨1)。貝類はヒレジャコ1。	—/—	鍋底状	0.15m以下	疎	×	×	掘込は基盤岩盤まで達している。調査者は貯蔵穴の性格も類推。
8	伊武部貝塚	第1号土坑 集石遺構	縄文後期中葉	1.8×1.6m/やや略楕円形 土器片僅量あるが小片のため土器型式は不詳。検出層6層では萩堂式・大山式土器が主体。	—/—	鍋底状	0.35m	やや疎	×	×	構成破は砂岩、千枚岩が主。掘込もやや不明瞭。
9	伊武部貝塚	第2号土坑 集石遺構	縄文後期中葉 (伊波式土器)	2.5×4.0/楕円形 土器(伊波式A・Bタイプ、伸泊式、面縄東洞式)のほか磨石(チャート円礫)1、敲石(砂岩製)1、メンガイ製貝輪1。貝類は、陸産マイマイなど陸産4種850g、シレナジミなど淡水産4種80g、海産68種38420g以上—イソハマグリ53・アモブネ173など潮間帯15種570g、マガキガイ151・アンボンクロザメ58・カスリシマベッコウガイ55・シラナミ22・クモガイ5など潮間帯下40種23440g、サラサバタイ26・チョウセンサザエ27・ヒレジャコ7など潮間帯下(リーフ外)13種14410g—多種多量に検出。	—/—	鍋底状	0.7m	疎	—	下層○	構成破は黒色片岩、サンゴ礫、河原石
10	伊武部貝塚	第3号土坑 集石遺構	縄文後期中葉 (伊波式土器)	2.5×2.5/略楕円形～円形 土坑内基底部から伊波式土器、嘉徳Ⅰ式土器、敲石(砂岩製)2。貝類は、陸産マイマイなど陸産2種1g、海産31種29560g以上—オオベッコウカサ2・アモブネ9など潮間帯7種90g、マガキガイ43・シャコウ2・シラナミ10など潮間帯下16種22200g、サラサバタイ5・チョウセンサザエ7・ヒレジャコ3など潮間帯下(リーフ外)8種7270g—多種多量に検出。	—/—	鍋底状	—	やや密	—	—	Ⅱ層下部で検出。覆土はⅡ層で宇佐浜式土器を検出。
11	伊武部貝塚	第4号土坑 集石遺構	縄文後期中葉 (伊波式土器)	1.6×1.1m/不整形な長楕円形 出土土器には嘉徳Ⅰ式土器もみられる(覆土=Ⅱ層からは宇佐浜式土器)。	—/—	鍋底状	0.25m	疎	—	—	構成破は小礫主体。
12	伊武部貝塚	第5号集石 遺構	縄文後期中葉 (伊波式土器)	1.5×1.0m範囲に不整形 伊波式土器、嘉徳Ⅰ式土器、石器のほか、貝殻検出。	—/—	鍋底状	0.12m	疎	—	—	破サイズ大(40cm台)＋小礫。掘込(土坑)認めず。破分布は面的。被熱礫、煤あり。
13	伊武部貝塚	第1号集石炉	縄文後期中葉 (伊波式土器)	1.4×1.1m範囲に不整形 周囲から伊波式土器、貝殻も散在。	—/—	鍋底状	—	疎	—	△	構成破はやや大型(20～30cm台)の円礫主体。土坑基底部に礫敷き、炭化木材3点検出。
14	伊武部貝塚	第2号集石炉	縄文後期中葉 (伊波式土器)	0.7×0.6m/略円形土坑は径0.55m 土坑内に遺物(土器、貝殻等)まったく検出されず。遺構周辺の出土土器は伊波式土器に収束。	—/—	浅めの 鍋底状	0.35m	密	△	○	1号集石炉に隣接。遺構上面は面的。構成破は黒色片岩、サンゴ角礫主体。破サイズも小礫(10cm未満)～大形礫(50cm台)と多様。
15	伊武部貝塚	第3号集石炉	縄文後期中葉 (伊波式土器)	1.4×1.3m/略円形土坑は1.0×0.7m/楕円形状 土坑内に土器等人工遺物検出されず。貝殻多量(サラサバタイ、メンガイ、シャコガイ)。	—/—	鍋底状	0.24m	密	△	○	構成破は殆ど黒色片岩。扁平大型礫(20～30cm台)主体。サンゴ礫・小礫も若干量あり。土坑下部に固やく灰層。土坑基底に炭化木2点。
16	伊武部貝塚	第4号集石炉	縄文後期中葉 (伊波式土器)	径1.2mの不整形な略円形土坑は1.0×0.8mの略楕円形 遺構上面で伊波式土器、軽石、貝殻多量(サラサバタイ、シャコガイ、チョウセンサザエ、クモガイ、アモブネガイほか)。土坑内からは人工遺物皆無に近く貝殻出土量も僅か(サラサバタイ、チョウセンサザエ各1)。	—/—	浅めの 鍋底状	0.30m	密	△	○	立石石列(石列A)検出。構成破は黒色片岩主体。
17	伊武部貝塚	石敷集石遺構	縄文後期中葉 (伊波式土器主体)	1.1×0.9mの楕円形状 土坑内から土器等の人工遺物、貝類は検出されず。	—/—	浅鍋底状	0.15m	密	—	○	破分布は密で面的(敷礫上面は磨耗)。構成破は黒色片岩主体で破サイズは10～20cm台。立石構造の石列(石列B)も検出。調査者は住居遺構の可能性も示唆。
18	伊武部貝塚	その他の集石①	縄文後期中葉 (伊波式土器)	(上部遺構)1.6×1.4m/略方形形状か (下部遺構)2.5×2.5m/略方形形状 石敷遺構検出レベルで伊波式土器、嘉徳Ⅱ式土器のほか敲石(角閃瑤瑤製)1、ヤコウガイ貝底1、ベッコウガサガイ製貝輪1。貝類は、陸産マイマイなど陸産3種230g、淡水産3種60g、海産53種16760g以上—イソハマグリ66・アモブネ119など潮間帯15種350g、マガキガイ73・アンボンクロザメ7・シラナミ14など潮間帯下26種8520g、ゴホウラ1・サラサバタイ33・チョウセンサザエ15など潮間帯下(リーフ外)12種7890g—多種多量に検出。なお、石敷遺構下(土坑内)からは嘉徳Ⅰ式土器が検出されたほか小形貝を多量検出(マイマイ、アモブネなど)。	—/—	鍋底状	—	密	△	○	Ⅲ層中で検出。集石遺構遺棄後に崩れたものか。

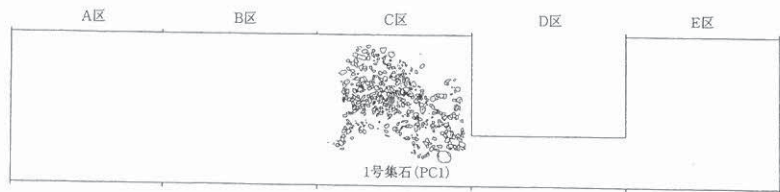
〃	〃	その他の集石②	縄文後期中葉 (伊波式土器)	径約2.1m/平面観不詳(円形か)	—/—	—	—	疎	—	—	Ⅲ層中で検出。集石遺構 遺棄後に崩れたものか。
〃	〃	その他の集石③	縄文後期中葉 (伊波式土器)	詳細不詳だが、礫集中および土器・貝殻が多く認められた模様。 径約2.2m/平面観不詳(円形か)	—/—	—	—	疎	△	—	Ⅱ層で検出。集石遺棄後に 崩れたものか。一部に 立石(?)。
8	吹出原遺跡	第2号集石 遺構	縄文後期後葉 (室川式土器)	3.5×2.6m/略方形(楕円形状)	—/—	—	—	密(?)	—	—	上面検出で埋戻し。平面 観察では堅穴状の掘込 に密な礫集合。構成礫は 石灰岩礫主体。
〃	〃	第7号A集石 遺構	縄文後期後葉 (室川式土器)	土器片(室川式土器グループ主体)のほか石皿破片2(礫質砂岩製1、凝灰岩製1)検出。遺構遺棄 の際に混入と報告者は推量。貝類ではマガキガイ、サラサバタイ、ベニシリダカ、マガキガイ、 種不明はイトマキボラ科、イモガイ科、タカラガイ科、オニツノガイ科。 2.2×1.3m/不整形な楕円形	—/—	略台形状	0.45m	密	—	△(微量)	炭微量検出あるが炉跡 と確定に至らず。構成礫 は石灰岩礫(拳大サイズ) 主体。
〃	〃	第13号B集石 遺構	縄文後期後葉 (室川式土器)	土器片(室川式土器のほか大皿式、カヤウチパンタ式)のほか磨石3、敲石4、砥石(結晶片岩製) 1、動物骨はジュゴン肋骨1、イノシシ肋骨1、 2.0×1.4m/略(長)方形	—/—	—	—	密(?)	—	—	13号A堅穴住居に切ら れる。上面検出で埋め戻 し。調査者は堅穴住居址 と想定。
9	古我地原貝塚	第1号遺構	縄文後期中葉 (伊波式土器 主体)	1.8×1.7m/楕円形状	—/—	浅い歪な鍋底状/0.3m	やや密	—	—	○	石灰岩礫主体で千枚岩 も若干量あり。周縁部に 大型礫、内側に中・小型 礫が多い傾向。礫下部に 焼土面。
10	苦増原遺跡	焼石集石遺構	縄文晩期前葉 (カヤウチ パンタ式土器)	1.5×0.8m範囲に疎らに散在	—/—	—	—	—	—	—	二次的に散乱したもの と推量。南側約1mに隣 接する落ち込みと関係(?) 。
11	砂辺サーク原 遺跡	—	時期不詳	0.9×0.8m/略円形	—/—	逆台形状	0.26m	密	×	×	大形(20～30cm台)の石 灰岩礫を積み込んだ状 態。
12	喜友名貝塚 I地区	集石遺構 [F9;12]	縄文後期中葉 ～晩期	2.4×0.3m/不整形な略長方形 土器	—/—	—	0.1m未満	やや密	×	×	構成礫は殆どが拳大程 度の石灰岩角礫。
〃	〃	集石遺構 [F11;8]	縄文後期中葉 ～晩期	2.4×0.5m/不整形な略長方形 土器(宇佐浜式に近似した胴部1ほか)、獣骨はイノシシ距骨1、リクガメ背甲板破片1、ブダイ 科1	—/—	—	0.20m	やや密	×	×	構成礫は殆どが拳大程 度の石灰岩角礫。
〃	〃	集石遺構 [G11;1]	縄文後期中葉 ～晩期	3.1×2.3m/不整形な略長方形 土器片、骨製品(イノシシ尺骨錐状製品)1、獣骨はイノシシ(椎体2・上腕骨1・尺骨1)、リク ガメ背甲板破片1、フエフキダイ科2、	—/—	—	0.10m	密	×	×	殆どが拳大程度の石灰 岩角礫。他より比較的 密で内容的に[F12;4] に近い。
〃	〃	集石遺構 [F12;1]	縄文後期中葉 ～晩期	1.15×0.3m/不整形な長方形 土器	—/—	—	0.1m未満	やや密	×	×	構成礫は殆どが拳大程 度の石灰岩角礫。
〃	〃	集石遺構 [F12;4]	縄文後期中葉 ～晩期	3.45×1.0m/不整形な長方形 土器(伊波・荻堂とみられる平底1ほか)、石斧転用品(砂岩)1、石皿(凝灰質砂岩)1、骨製品(イ ノシシ下顎大歯加工品)1、獣骨類はイノシシ(肋骨2・肩甲骨1・尺骨2・脛骨1・踵骨2・足根 骨2・下顎右歯1)、ジュゴン肋骨1のほかリクガメ背甲板破片2、サメ脊椎骨1、フエフキダイ 科1(体長復元28.0±cm)、ペラ科1、ハリセンボン科1、種不明計5、	—/—	—	0.1m未満	密	×	×	構成礫は大型礫若干あ るが殆ど拳大程度の石 灰岩角礫。落ち込みに 礫が集中した状況で 焼土・熱被破砕礫。
〃	〃	集石遺構 [G12;5]	縄文後期中葉 ～晩期	1.25×0.4m/不整形な長方形 土器	—/—	—	0.1m未満	やや密	×	×	構成礫は殆どが拳大程 度の石灰岩角礫。
〃	〃	集石遺構 [G12;6]	縄文後期中葉 ～晩期	0.8×0.3m/不整形な略長方形 遺構内から人工遺物検出されず。	—/—	—	0.1m未満	やや密	×	×	構成礫は殆どが拳大程 度の石灰岩角礫。
〃	〃	集石遺構 [G12;7]	縄文後期中葉 ～晩期	0.75×0.4m/不整形な長方形 遺構内から人工遺物検出されず。	—/—	—	0.1m未満	やや密	×	×	構成礫は殆どが拳大程 度の石灰岩角礫。
〃	〃	集石遺構 [H12;3]	縄文後期中葉 ～晩期	1.2×0.3m/不整形な長方形 遺構内から人工遺物検出されず。	—/—	—	0.1m未満	やや密	×	×	構成礫は殆どが拳大程 度の石灰岩角礫。
〃	〃	集石遺構 [H12;4]	縄文後期中葉 ～晩期	0.6×0.35m/不整形な長方形 土器	—/—	—	0.1m未満	やや密	×	×	構成礫は殆どが拳大程 度の石灰岩角礫。
13	スバタキ遺跡	401号堅穴 内検出集石	縄文晩期後 相当	1.35×1.95m/略楕円形か 集石内からの出土遺物の詳細は不詳だがヒト歯、シャコガイ科各1が検出されているという。堅 穴住居床面では仰原式土器が出土。 長軸4.0m前後/円形(略扇形状)	—/—	—	—	密	×	×	401号堅穴住居跡の中央 付近で検出。構成礫は石 灰岩角礫。
14	宇地泊兼久原 第一遺跡	集石土坑A	縄文後期相当 ～弥生併行期	土器等の人工遺物および動物骨貝類等の自然遺物は殆ど検出されず。上部集石付近では縄文後期 ～沖縄後期前葉頃の土器(伊波・荻堂式～浜屋原式)が出土。 長軸4.0m前後/略円形	—/—	鍋底状	0.3m	密	△	○	基底(床)、壁部にビー チロック、石灰岩大型 礫(30～50cm大)を配置。 炭層・固着した灰層あり。 祭祀的性格の可能性も。
〃	〃	集石土坑B	縄文後期相当 ～弥生併行期	集石土坑A同様土器等の人工遺物、動物骨貝類等の自然遺物殆ど検出されず。 長軸4.0m前後/略円形	—/—	鍋底状	0.3m	密	△	○	遺構構造・内容は集石土 坑Aと同様だが掘込や や浅め。検出時状況で埋 め戻し。
〃	〃	集石土坑C	縄文後期相当 ～弥生併行期	集石土坑A同様土器等の人工遺物、動物骨貝類等の自然遺物殆ど検出されず。 1.1×1.0m/略方形	—/—	—	—	やや密	×	×	検出時状況で埋め戻し。
15	城間遺跡	貝塚後期後半 (くびれ平底)	貝塚後期後半 (くびれ平底)	当該遺構が検出されたB地区南西は第2類土器(くびれ平底)。 径約1.0m範囲に散在した状態	—/—	レンズ状	×	疎	×	△	構成礫は石灰岩礫で、 サイズも殆どが拳大程 度。
16	阿波連浦貝塚	焼石遺構	弥生時代併行 浜屋原式主体	遺構内出土の遺物内容は不詳だが、周辺検出(Ⅳ層)の土器は浜屋原式土器。周辺検出の木炭片の 炭素C14年代測定値は2060±100(110B.C.) 7～8.0×3～4.0m/略楕円形	—/—	レンズ状	0.2m未満	密	—	×	硬質砂岩角礫。熱被礫も 複数確認。焼土面未検出 等から調査者は地炉が 廃棄された痕跡と推量。
17	大原貝塚 (B地点)	SH01	縄文後期後葉 ～晩期前葉(?) 室川式 ～宇佐浜式	土器ほか人工遺物は未検出。礫集中内よりシャコガイ・ヒメジャコなどの貝類検出。 1.45×1.3m/円形～略方形	—/—	逆台形状	0.30m	密	×	×	構成礫は拳～人頭大で、 サンゴ円礫も含む。周辺 で人骨検出されており、 調査者は埋葬関係遺構 と推量。
18	北原貝塚	1号集石遺構	縄文後期中葉 (伊波式土器)	遺構内出土の遺物内容は不詳だが、検出層(Ⅲ層)は伊波式土器主体。 1.5×1.2m/略楕円形状	—/—	逆台形状	0.70m	密	×	×	構成礫は20～30cm大の サンゴ角礫・円礫で、礫 分布は平面的。調査者は 炉的機能も推量。
〃	〃	2号集石遺構	縄文後期中葉 (伊波式土器)	遺構内出土の遺物内容は不詳だが、検出層(Ⅲ層)は伊波式土器主体。 1.5×1.2m/略楕円形状	—/—	逆台形状	0.70m	密	×	×	構成礫はサンゴ角礫・円 礫。熱被破砕礫も確認。礫 分布は密だが断面図で は1号同様平面的な観。



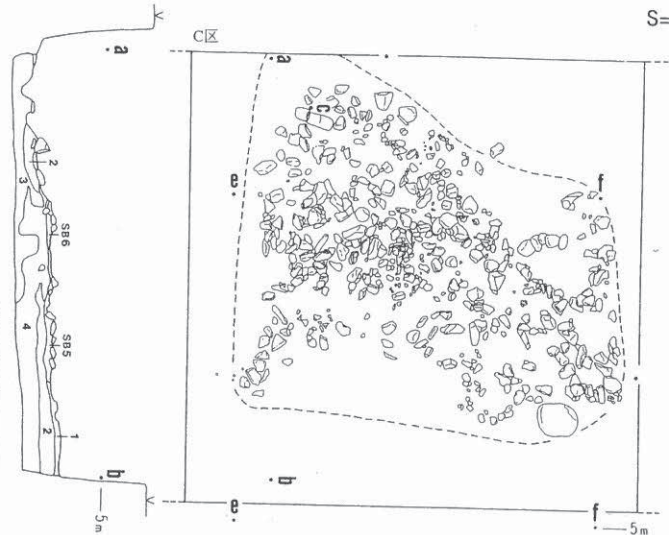
(写真) 2. 具志川島遺跡群南地点の集石遺構
(伊是名村教委1993)



(写真) 伊是名貝塚1号集石検出状況
(伊是名貝塚学術調査団2001)



S=1/150



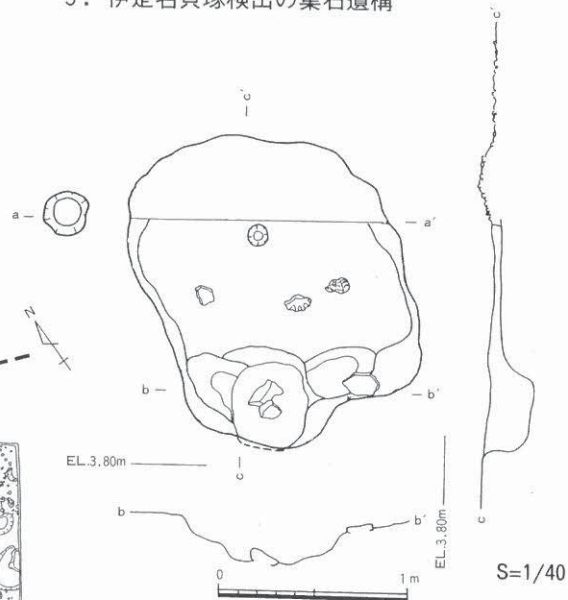
S=1/50

3. 伊是名貝塚検出の集石遺構



S=1/80

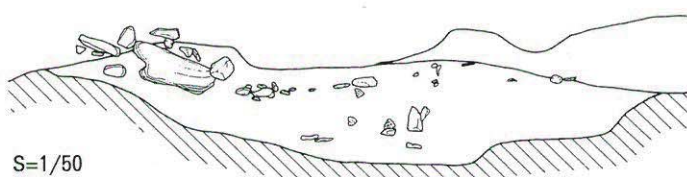
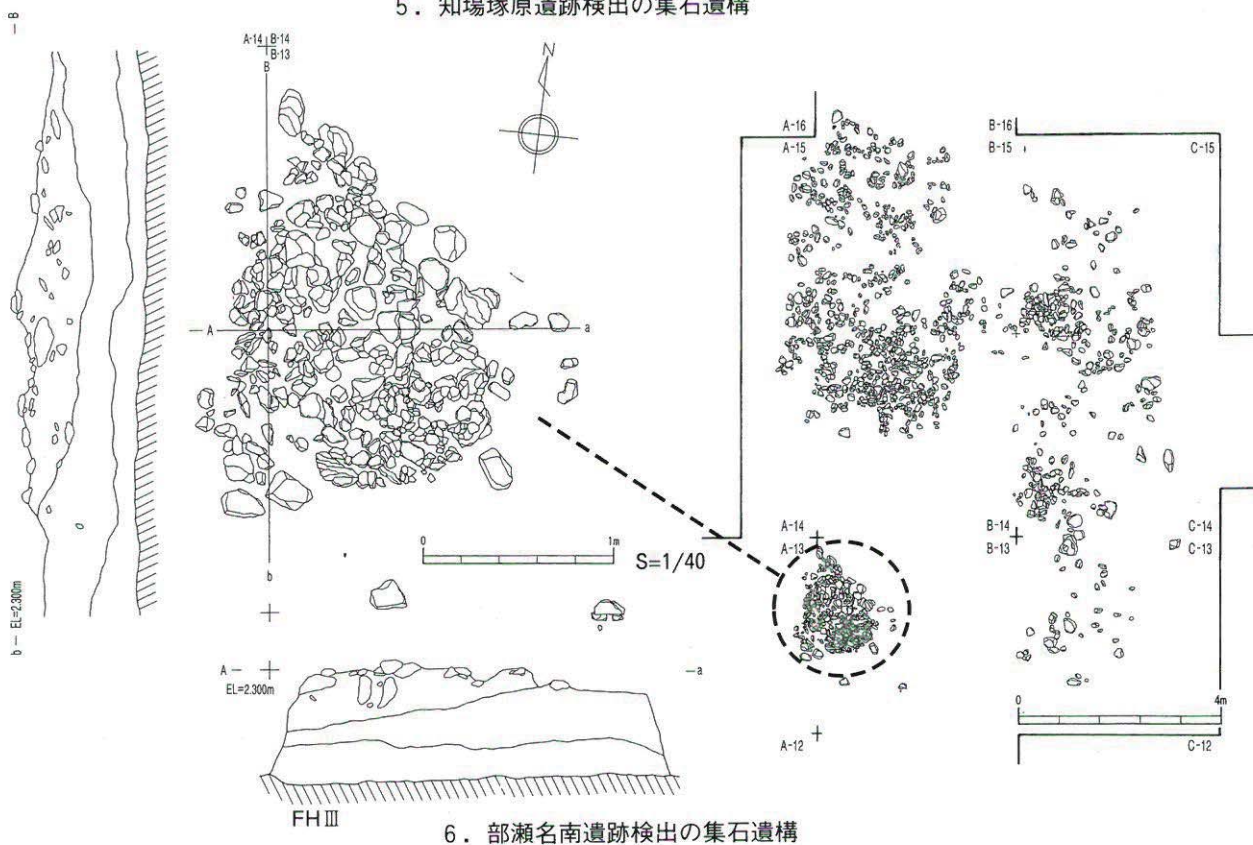
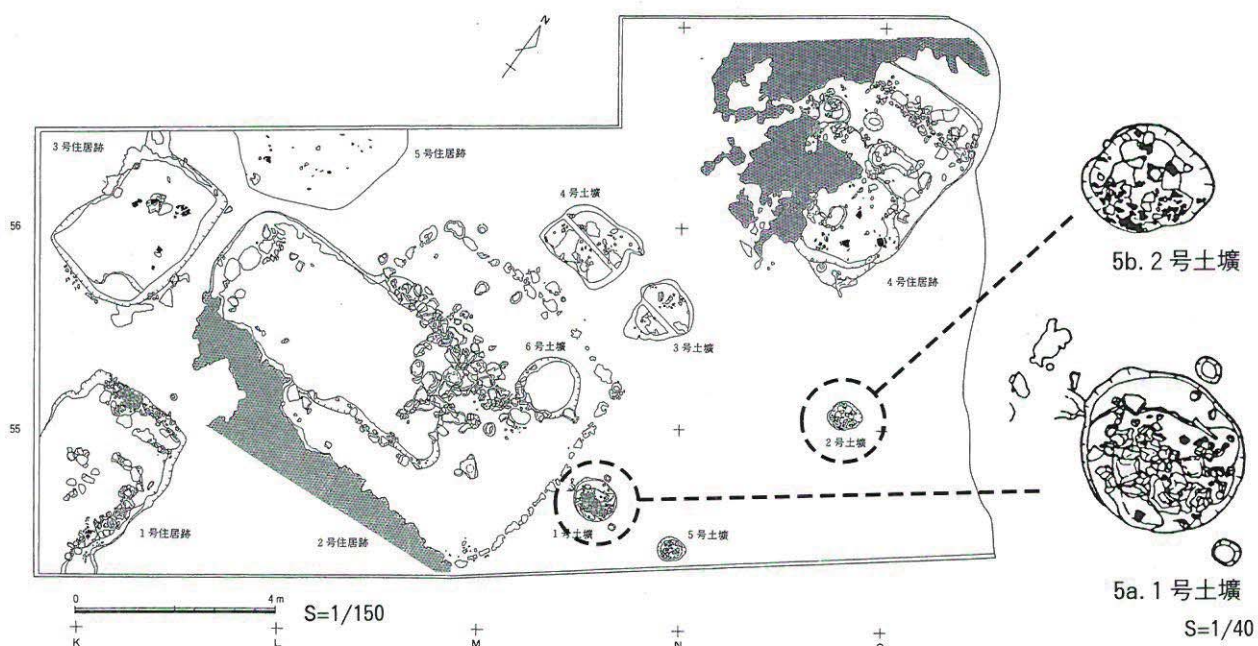
4. 具志堅貝塚検出の集石遺構



S=1/40

図1. 沖縄諸島地域の貝塚時代集石遺構(1)

各図番号は表2 遺跡番号・文末記載リスト番号と同じ



7-1. 伊武部貝塚検出の集石遺構

各図番号は表2遺跡番号・文末記載リスト番号と同じ

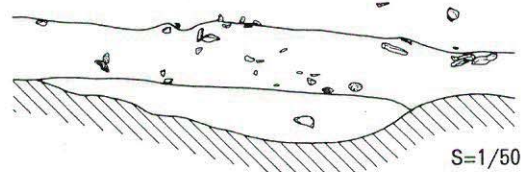


図2. 沖縄諸島地域の貝塚時代集石遺構(2)

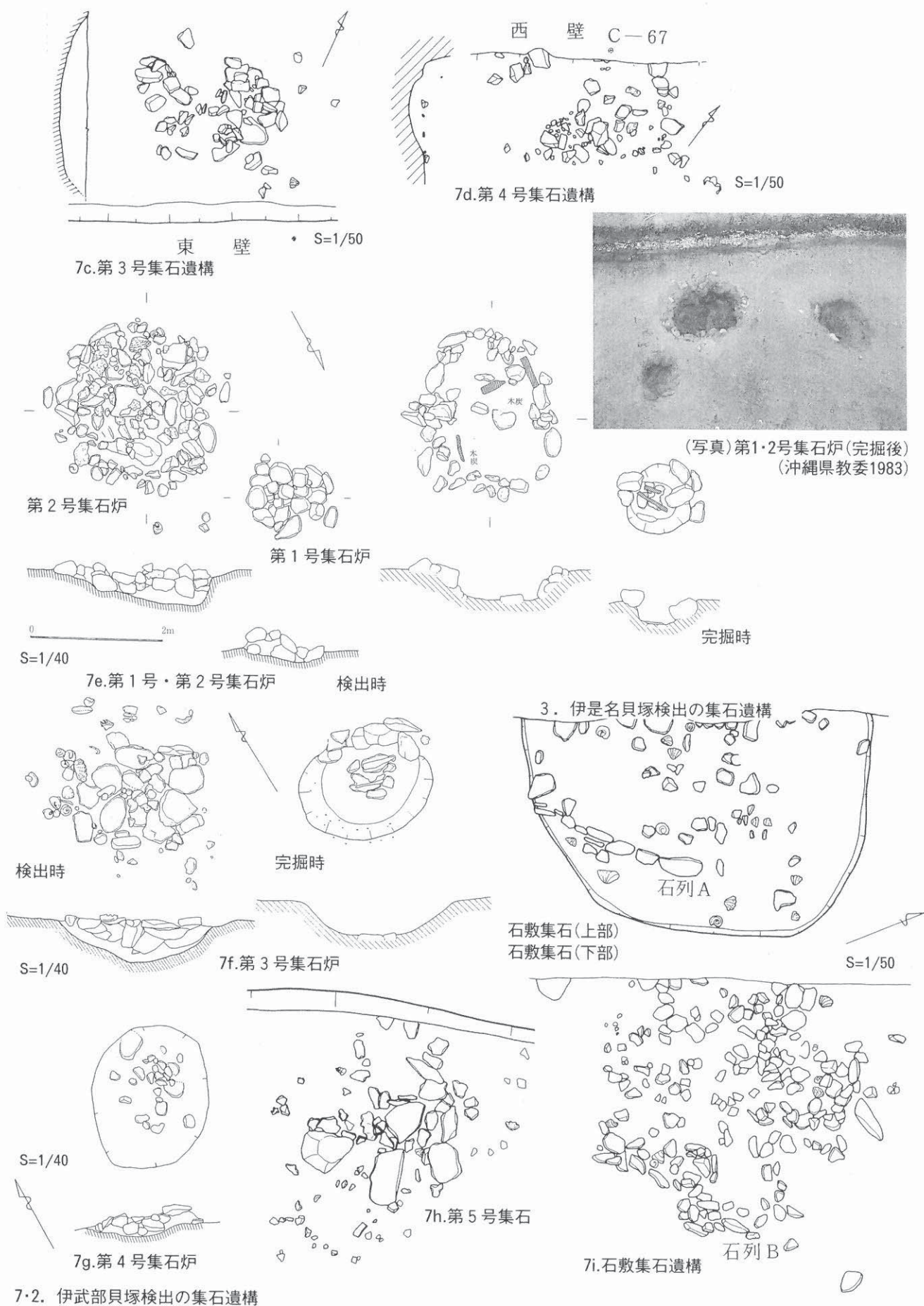
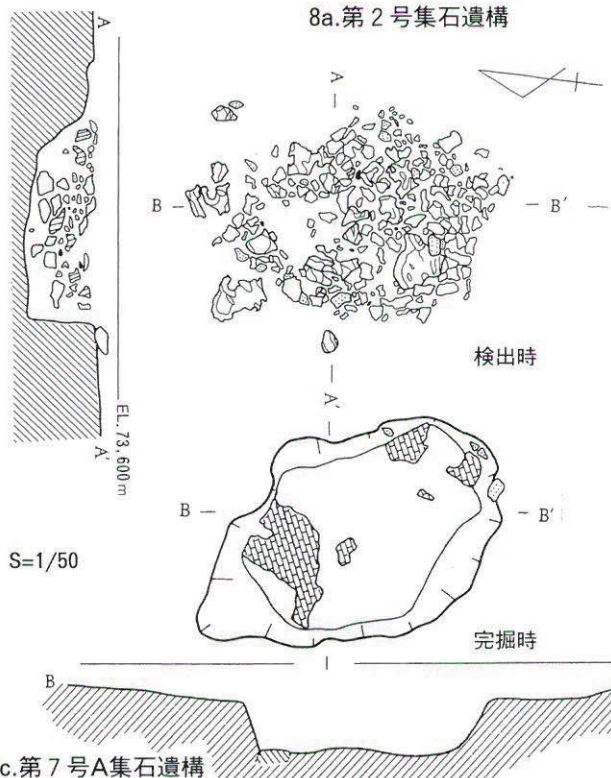
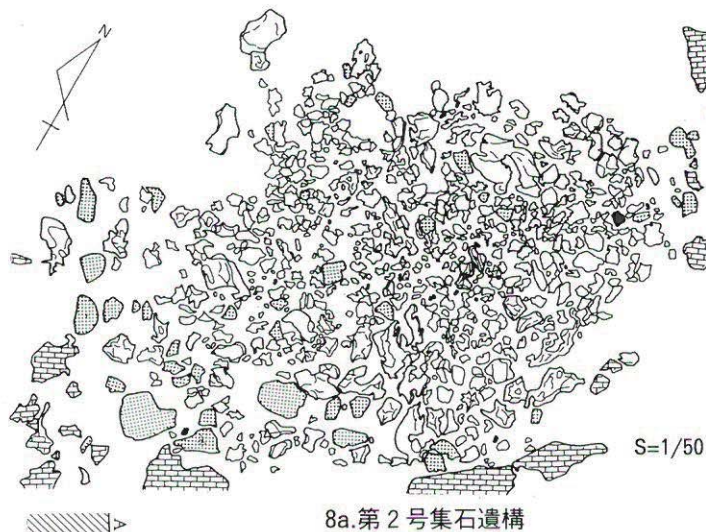
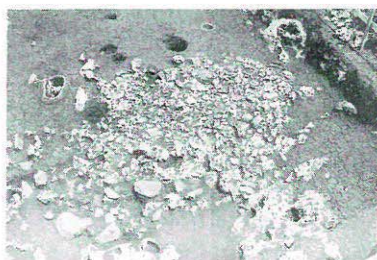
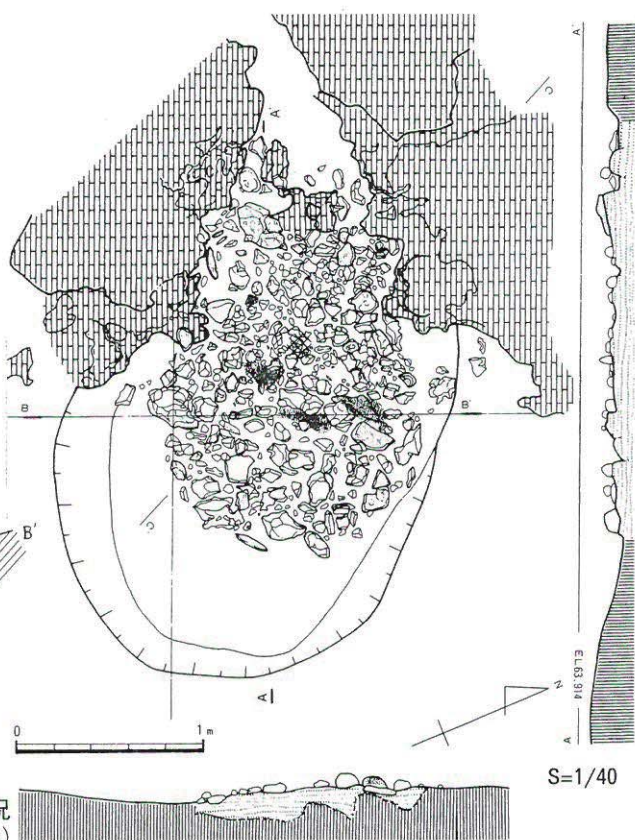
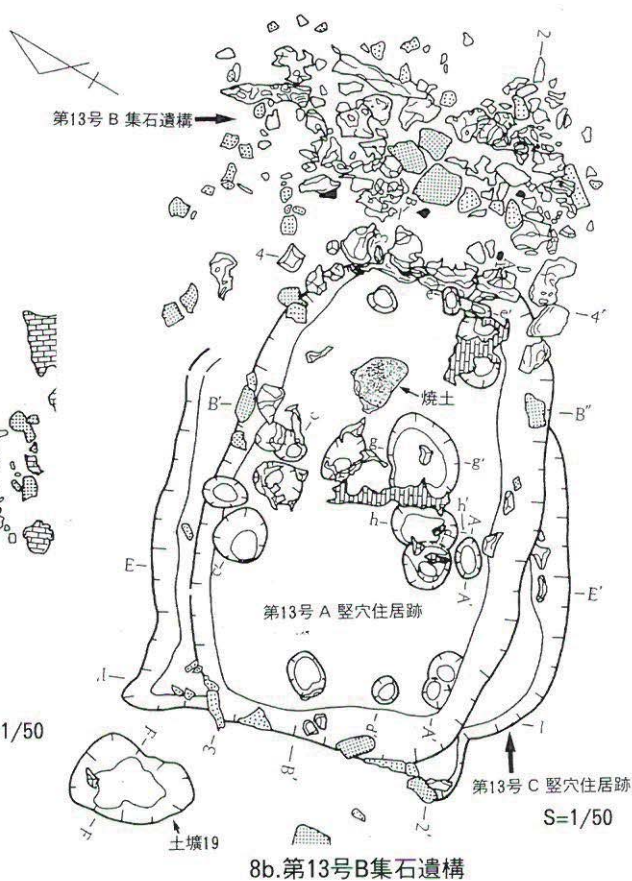


図3. 沖縄諸島地域の貝塚時代集石遺構(3)

(写真a) 第2号集石遺構
検出状況
(読谷村教委1990)



(写真b)
第7号集石遺構半載状況
(ibid)



各図番号は表2 遺跡番号・文末記載リスト番号と同じ

8. 吹出原遺跡検出の集石遺構

図4. 沖縄諸島地域の貝塚時代集石遺構(4)



(写真)

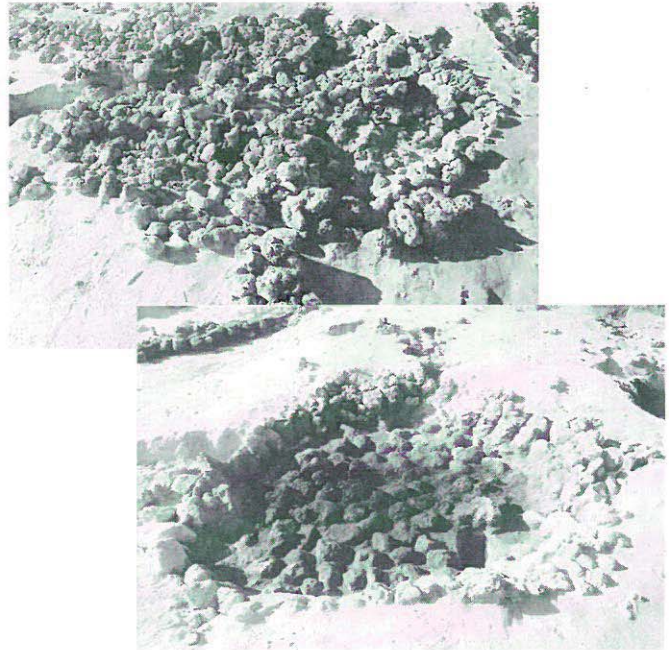
13. ヌバタキ遺跡401号竪穴内検出の集石遺構
(宜野湾市教委1994)

各図番号は表2遺跡番号・
文末記載リスト番号と同じ

図5. 沖縄諸島地域の貝塚時代集石遺構(5)



(写真)集石遺構検出状況(宜野湾市教委2002)



(写真a)集石土坑A検出状況(Ibid)
(写真b) 同 完掘状況(Ibid)

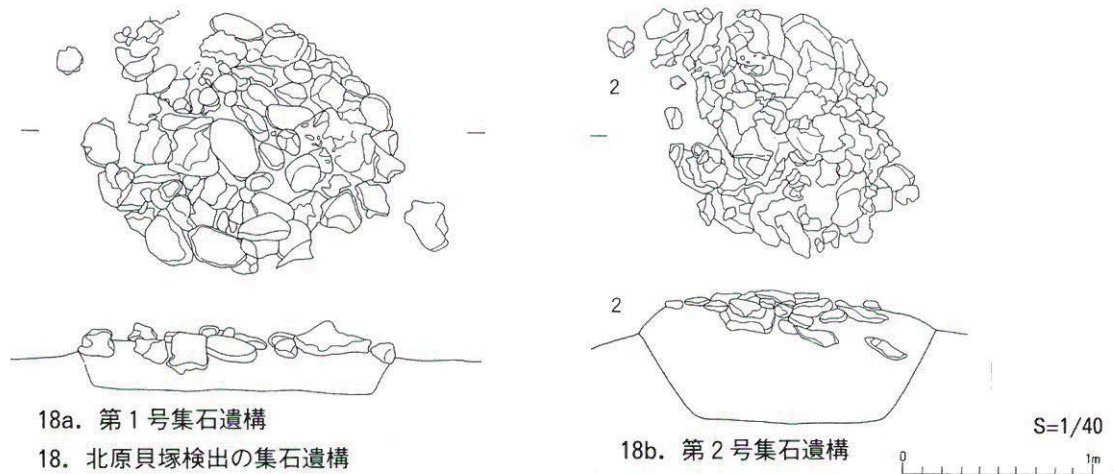
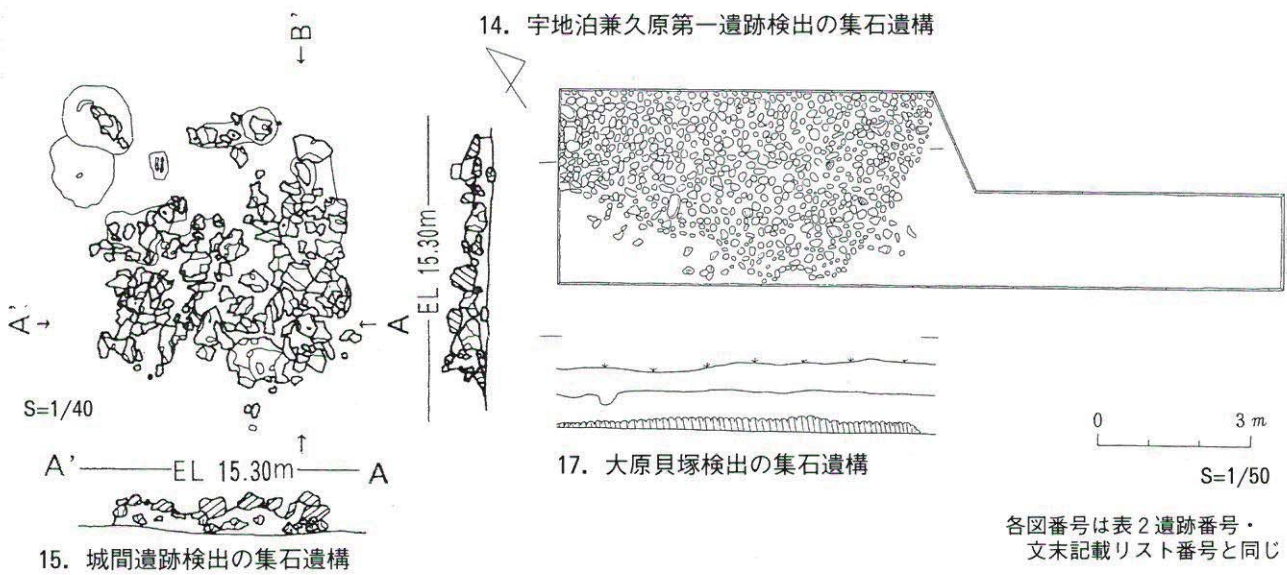


図6. 沖縄諸島地域の貝塚時代集石遺構(6)